

14. 人と、水と、龍と —水害多発地域の民話にみる自然と人間の関係—

久島桃代

1. はじめに

本研究では、濃尾平野に多く存在する輪中と、この地域に残されている水にちなんだ民話に着目する。東から木曾川・長良川・揖斐川という大河川が流れる濃尾平野では、東高西低の地形条件によって木曾川、長良川が網目状に揖斐川に乱流し、いくつもの川島が生まれた。また、この地域は多雨地域でもあり、豪雨の際には木曾川の水が長良川・揖斐川に流れ込んで逆流や洪水が起き、そのたびに川島では大きな被害が出た。輪中とは、このような地域において発達した、堤防によって周囲が取り囲まれた空間と、その中で形成された水防共同体の両方を指す。

こうした自然条件にあって輪中をはじめ木曾三川流域には、水害に関連した民話が非常に多く残されている。民俗学者の柳田國男は、民話の中でも「できるだけ固有名詞でもって真実めかし、其の時代を示し、其の由来を根拠づけて信を置き得るやうにする」ものを「伝説」と定義し、その基礎には信仰があるとした（柳田1934=1998, p.159）。柳田の言に従えば、木曾三川流域に分布する洪水をめぐる民話にも、そこで生きた人々の自然への信仰をうかがい知ることができるはずだ。

ところで、木曾三川流域の民話には、超自然的な力を持つ龍や蛇がしばしば登場する。おおよその筋としては、大雨などの水害は巨大な力を持った龍や蛇によるものであり、こうした龍や蛇を水神として畏れ敬いながら人間の生活は営まれてきたというものだ。現代の視点からみれば虚構性が高いストーリーであり、それゆえこれまでの、地形や土地利用、治水史といった科学的な輪中研究においてはほとんど顧みられることがなかった。しかし、近代的な土木技術がなく、自然に対して人間が脆弱だった時代に生み出されたこれらの物語は、2011年の東日本大震災と原発事故によって科学技術の限界に突き当たり、自然に対する従来とは異なる視点、関わり方が求められている今だからこそ、再読の価値があるのではないか。後章でみるように、この手がかりとなる方法や視点を最近の環境研究も提供してくれる。このような動きも参考にしながら、本研究では水にまつわる人間と非人間との交渉という物語が意味するものを考えたい。

2. 研究方法

本研究では、濃尾平野の輪中に伝わる水にちなんだ民話を対象とする。具体的には、国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所が発行する季刊誌『KISSO』の1号から100号に掲載された、「水にまつわる民話」を取り上げる。ちなみに、これらの民話は、創刊100号を記念して発行された『水にまつわる民話集』（以下『民話集』、2017年）にまとめられ、同書を本研究でも使用する。なお、同書に収められる民話の舞台は、輪中だけでなく、広く木曾三川流域に及ぶ。そして、輪中以外の地域に、洪水や日照りといった水問題に関する民話が多くある。そこで本研究では、これらの輪中以外の地域の民話も分析の対象とする。

3. 研究にあたっての視座

具体的な分析へと入る前に、「民話を分析する」という本研究の方法について、これが現実の空間や場所の研究や、そこでの人間と自然との関わりを考える上でどのように有効なのか、簡単に整理する。空間や場所と伝説

研究の関係については、地理学における民話研究をみていく。また、人間と自然の関係にアプローチするうえで有効性については、文学作品から環境問題を議論している「エコクリティシズムEcocriticism」と呼ばれる分野の動向を参照する。

3.1 地理学における民話研究

現実の空間や場所に神話や伝説からアプローチした研究として、佐々木高弘の歴史地理学研究がある。佐々木は、日本における王権の空間統治の形成を、神話世界を地図化することで明らかにした。佐々木によれば、「口承の物語の一切を包括」する民話のうち（佐々木2014a, p.216）、世界の起源を描く神話や、それが伝わる地域では信じるべき一種の「歴史」として機能している伝説は、地理学研究にも活かせるという。なぜなら、神話や伝説で描かれる場所は「普通名詞としての抽象的な場所」ではなく、現実にあるものだからだ（佐々木2014a, p.219）。神話や伝説が描く場所と現実の場所を対応させることで、その場所がどのような意味に満たされていたのかを知る手がかりとなる。佐々木はこの考え方を、災害認知研究に活かす可能性についても示唆している（佐々木2014b）。

3.2 エコクリティシズム、フェミニズムにおける自然と人間

エコクリティシズムecocriticismは1990年代初頭にアメリカで生まれた、環境表現を考察対象とする学際的な文芸批評の動きである（ビュエルほか2014）。当時のアメリカでは、19世紀後半に始まった環境保護運動が1960年代に再燃し、そのなかで人間と自然との関係を描くフィクション、ノンフィクションが多く生み出されていた。環境への配慮の精神に基づくこれらの作品には、環境問題に対する人々の想像力やイメージを刺激し方向付ける力や、人間と自然の関係についての深い思索がある。エコクリティシズムの出発点にはこのような信念があった（ビュエルほか2014；結城2020）。

エコクリティシズムにとって、自然と人間の関係を問うことは、同時に自然とは何かを問うことでもあった。それは、未開拓の自然空間への着目という初期の傾向から、じきに人種やジェンダーの問題とも交差するハイブリッドな領域として自然をとらえるようになったことからわかる。この「自然とは何か」という問いの中で、エコクリティシズムが遭遇・接近したのが、近代科学に潜むジェンダーや生物学的決定論との格闘の中で、同じく自然とは何かを問わざるを得なかったフェミニズムだった。エコクリティシズムと出会った頃のフェミニズムは、女性と自然の結びつきを本質主義的にとらえがちだった1970年代のエコフェミニズムの難渋、1990年代のポストモダニズムにおけるテキスト主義、社会構成主義の批判的受容を経て、構築主義と自然や身体の物質性との間の亀裂を克服する著作が続々と現れていた（Iovino and Oppermann 2012）。

これらのいわゆるマテリアル・フェミニズムと呼応しながら、近年のエコクリティシズムはマテリアル・エコクリティシズムと呼ばれる段階に入っている。そこでは、もの（物質）とことば（表象）、身体性embodimentと形式formは、実践のダイナミズムにおいて互いに絡み合いながら出現し、実存が切れ目なくまとまった場の一部となる（Iovino and Oppermann 2012, p.77; Barad 2007）。エージェンシーが拡散したこの世界では、もはや人間は中心的な存在ではなく、ポストヒューマンな状況にとってかえられる。人間だけでなく自然や動物といった非人間もまた社会を構成する主体であり、自らの意味を生み出すことができる「物語られる物体」となる。（Iovino and Oppermann 2012；森 2020）。

マテリアル・エコクリティシズムの議論は、木曾三川流域の民話に登場する龍や蛇と人間との関係を考える際の手がかりとなる。すなわち、非人間的な存在である龍や蛇に人間と同じような意思と言葉を持たせ、超自然的な力を発揮させるというストーリーは、マテリアル・エコクリティシズムが提示するポストヒューマンな世界と重なるのである。また、エコクリティシズムを含む環境研究の諸領域では、自然と人間との関係性をみる視角として、環境の空間性への着目の重要性が訴えられるが（生田2005）¹⁾、木曾三川流域という具体的な地理と歴史

を持つ空間で、人間と水（雨、洪水）と龍・蛇との関係を考察する本研究は、このようなエコクリティシズムの要請にこたえるものにもなる。後章では、民話が描くこのようなポストヒューマンな世界をさらに探っていく。

4. 木曾三川流域における龍・蛇をめぐる民話の場所と時間

4.1 水神信仰・伝承文学における龍・蛇

木曾三川流域の民話に登場する龍・蛇について検討する前に、水神としての龍や蛇の一般的な特徴を民俗学や伝承文学の知見からまとめておく。水稻栽培を生活基盤とする日本では、様々な信仰の中でも水神信仰は重要な位置を占めてきた。水神の象徴としては日本では蛇（特に白蛇）があげられるが、中国の信仰を受容して竜²⁾と結合し、雨乞いには雨の支配者としてあるいは淵の主などとして登場する（田辺1998, pp.586-587；古家1998, p.537）。なお、中国における竜神信仰もまた、系譜をたどると仏教とともにインドから伝わった水神ナーガの影響を受けており、ナーガの説話の原型はインド古来の蛇の伝説に求めることができるという（八木2005）。

このように、水神信仰における龍と蛇の関係は非常に入り組んでおり、それは、今昔物語集や宇治拾遺物語といった古代中世の伝承文学からも指摘できる。森（2019）は、これらで描かれる龍と蛇は厳密に区別できるものではなく、一括して扱うべきだとして「龍蛇」概念を用いる（森2019）。従って、本研究で龍や蛇を表記する際も、龍・蛇を厳密に区別せず、「龍蛇」と表記すべきかもしれない。だが本稿が依拠する『民話集』では、龍や蛇は「白竜」「竜」「龍」「大蛇」といった形で表記され、それぞれ個別的な像を持っているようにもみえる。そこで本稿では、個々の具体的な民話を取り上げる際はそこでの文中表記に従い、木曾三川流域の民話一般について述べる際は「龍・蛇」「龍と蛇」といった表現を使用して、「龍蛇」概念の使用は保留する。

最後に、水神としての龍と蛇の性格であるが、大変両義的である。一方では、水難事故をもたらし、人間に危害を加える神として君臨する。だがもう一方では、農耕生活に水を供給し豊穡をもたらすという顔も持っている（古家1998）。

4.2 龍や蛇をめぐる民話の分布状況

『民話集』に収められた民話の舞台は、出典元となっている文献のタイトルから明らかとなる。（例えば『郡上八幡町史』など）収められた民話のうち、龍や蛇が登場する32話の分布状況を表1に示した。

表1 龍や蛇をめぐる民話の分布状況

県	市町村自治体
岐阜県	安八町、川島町（各務原市）、各務原市、南濃町（海津市）、養老町、中津川市、高根村（高山市）、朝日村（高山市）、八幡町（2、郡上市）、板取村（関市）、美濃加茂市、美濃市、可児町（可児市）、池田町、美山町（山県市）、羽島市、垂井町、岩村町（恵那市）、今須町（関ヶ原町）、金原村（本巣市）、大野町、多治見村（多治見市）、北方町、七宗町、土岐津町（土岐市）
愛知県	一宮市、立田村（愛西市）
三重県	木曾岬町、長島町（桑名市）
長野県	南木曾町、山口村（岐阜県中津川市）

『水にまつわる民話集』より作成。

注1) KISSO 第1号～100号まで収録された民話98話のうち、龍や蛇が登場するもの32話を抽出。

注2) 括弧内は現在の自治体名。数字があるのは同一自治体で2件以上民話があった場合の件数。

4.3 民話で描かれる時代・人物

龍や蛇が登場する民話の中で時代がある程度特定できるもの、すなわち前述の佐々木の分類に従えば「伝説」に区分されるものをみると、32話中9話が該当した（表2）。それ以外は、「むかしむかし」といった定型表現や「1000年以上昔」など、時期が曖昧にされていた。時代が特定できる民話は例えば、郷土史上の出来事や人物に関連するものだったり、古代神話や弘法大師伝説、在原業平伝説など、日本史上の人物にちなむものだったりする。

少数ではあるが場所と時代が特定できる民話（伝説）があることは、そこで描かれる世界を現実の地理や歴史と結びつけて検証できるということだ。後でみるように、木曾三川流域の水神信仰には他の地域にはない特徴があるのだが、その意味も現実の地理、歴史と照らし合わせることでより深く理解することができるだろう。

表2 『民話集』において伝説に区分される民話

民話のタイトル	時代	場所	時代を特定する人物、出来事など
ヤロカの大水	慶安3（1650）年	岐阜県各務原市	「ヤロカの大水」として記録あり
釜段のさいかち	明暦4（1658）年	岐阜県養老郡養老町 （釜段輪中）	藤田半入
赤壁城	大永6（1526）年以降	岐阜県中津川市	苗木城
雨ごいの竜	1000年以上昔	愛知県一宮市 （真清田神社）	弘法大師
遠浅神明神社と大蛇	慶長8（1603）年頃	三重県桑名郡長島町	遠浅神明神社（再建後）
白竜の昇天	昭和初期	愛知県海部郡立田村 （竜池）	木曾川の改修工事／時代の明記あり
白竜退治	平安時代	岐阜県揖斐郡池田町	俵藤太
業平寺の大蛇 垂井町表佐	平安時代	岐阜県不破郡垂井町 （業平寺）	在原業平
本洞のうわばみ	承久3（1221）年以降	岐阜県恵那郡岩村町	岩村城築城後

『水にまつわる民話集』より作成。

注）「場所」にある地名は『民話集』に収められた民話の出典元が刊行された当時のもの。

5. 木曾三川流域の民話にみる龍・蛇の特徴

5.1 龍・蛇の両義性

木曾三川流域の民話に登場する龍や蛇もまた、水神信仰で一般的にいわれるように両義的な性格を持つ。ある民話では、龍の怒りに触れると大雨が降り、水害が起きるとされる。また、水害とは直接関係ないが、池の中に人間を引きずり込むと恐れられる大蛇や、村里を荒らす白竜が登場するものもある。いわゆる「災い」をもたらす存在としての龍、蛇の描かれ方である。しかし別の民話を見ると、日照り時に拝むと雨を降らせてくれる、いわゆる「救済」をもたらす存在として龍や蛇が描かれていたりする。どちらの特徴にも地域的な偏りはなく、例えば岐阜県各務原市には、雨ごいをする雨を降らせてくれる大蛇の話と、竜の仕業によるものとのほめかされる「ヤロカの大水」の話が両方伝わっている。民話全体を眺めれば、龍や蛇が非常に両義的な存在として語られていることがわかる。

だが、同一の龍や蛇の行動のなかにも、解釈不能といえるようなとらえがたさを示すものがある。一例を挙げると、岐阜県揖斐郡池田町に伝わる民話では、村里を荒らす白竜が武士によって退治されるが、その様子は次の

ように描かれる。

● 岐阜県揖斐郡池田町の民話「白竜退治」より

この矢の鋭さに恐れをなした白竜は、池の堤を破って逃げ出しました。白竜の巨体が体当たりした堤防は無残に崩れ落ち、空を切り裂く激しい雷雨に山は牙を剥き、怒涛のような泥の波は、池も谷も押しつぶしてしまいました。この土砂は平地を作り、新しい村が誕生しました。

(『民話集』 p.31より。出典は『池田町史通史編』池田町1975年)

さんざん村里を荒らしてきた白竜が退治される様子は、さながら大雨による洪水を思わせる。しかし、その結果生み出されたのは、(おそらくそれまではなかった) 平らな土地と共同体であった。この物語において、白竜や白竜がもたらすものを、善か悪か、恵みか厄災かの一方に位置づけることは非常に難しい。この龍・蛇の捉え難さは、その力の絶対性³⁾ と比べると一層際立つ。この民話世界では、龍や蛇の、さらにこれらと不可分とされる水害という自然現象を、人間にとって理解可能な地平へと引き入れることが拒まれているのである。

5.2 龍・蛇と人間との曖昧な境界線

民話に登場する龍や蛇の存在の曖昧さは、別の側面からも指摘できる。それは、龍や蛇と人間との境界である。『民話集』には、女性(大抵「美女」という設定)に化身した龍や蛇が登場するものが7話、女性名(露洞姫)を持つ蛇が登場するものが1話ある。いくつか内容の要約を挙げる。

● 岐阜県大野郡朝日村(現高山市)の民話「美女と惣左衛門」より

腕のいい獵師の前に美女が現れ夫婦となる。子供が生まれ月日が流れたが、女は一向に齢をとらず美しいままであった。ある日獵師が耐えきれず女のことを村人に話すと、女は大蛇に変身し子どもを連れて池に身を投げた。その途端、池の水が一気に溢れ、洪水となって村を襲う。男が水を食い止めようとした瞬間、その姿は大きな蛙の形の岩に変わり、濁流に呑まれていった。

なお、人間の女性の名前が付けられた大蛇が登場する民話は、次のようなものだ。

● 岐阜県郡上郡八幡町(現郡上市)の民話「金物を嫌った大蛇」より

小駄良川に注ぐ谷の洞窟に、露洞姫と呼ばれる大蛇が住んでいた。洞窟に住み飽きた露洞姫が海に出ようと川を下ったところ、周囲一面が大暴風雨になり、川はたちまち洪水となった。

人間に化身する神については、コミュニケーション手段の観点から理解されてきた。中世文学者である田中貴子によると、普段は実体が希薄な神が人間と接触する回路には、①雷・大雨・旱魃・河川の氾濫などの自然現象として現れる、②人の身体を借りる、あるいは人の身体に似せる(人の姿を装う)、の二つのケースがあるという。①の場合、人間にとって都合の良いものもそうでないものも、「自然現象は人に災いと幸いをもたらす絶対的驚異、カミの仕業と信じられることが多く、(中略)カミとは不可分な現象とされた」(田中1995, p.177)。しかし①では大まかにしか神の意志は伝達できないため、さらに細やかなコミュニケーションが必要になると②の形式に移行するという。

このように、人間に化身する神は、コミュニケーションの側面から、つまり神と人間との理解可能性の側面から説明されてきた。しかし、美女に化身した大蛇の物語から浮き彫りとなるのは、むしろ神(自然)と人間との理解不可能性と、そしてコミュニケーションを論じる際にしばしば前提となる、互いに排他的な存在として自己

と他者の間の境界が融解していく状況である。まず後者からみていこう。

この民話では、最初に神（自然）が人間の領域に入り（美女に化身）、続いて人間が自然の領域へと完全に引き入れられてしまう（大きな蛙の形の岩に姿を変える）。そこにあるのは、絶え間なく引き直される神（自然）と人間との間の境界線だ。ないしは、どこまでが人間でどこからが自然（自然）なのかが不明確な、両者のありようである。そこで描かれるのは、まさにエコクリティシズムで示されていた、人間と非人間とが互いに絡み合い、切れ目なくまとまりながら構成する世界だといえる。

しかし、ここでさらに着目したいのが、その間の境界が曖昧になりながらも、決して同化することのない神と人間との関係、もしくは自然と人間との関係である。前述の、女に化身し獵師と結ばれる大蛇の話では、最終的に女（神）は男（人間）のもとを去る。その契機となるのが、男が女の超自然的な力に疑いを持ったことであるのは興味深い。場合によっては非常に近い関係になる神（自然）と人間だが、それでもなお残る理性を超えた部分を無理に人間側の理屈で説明しようとする、たちまち神（自然）は人間から遠ざかってしまう。場合によっては、人間の方が神（自然）の領域へと否応なく引き入れられるというしっぺ返しが待っている。蛇が人間となり、人間が岩へと姿を変えるという物語からは、限りなく接近しながらも厳然と存在する両者の間の差異と、これを安易に踏み越えてはならないという戒めが浮かび上がる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、木曾三川流域に残された民話から、水にまつわる人間と蛇や龍との交渉について検討してきた。ここでは、水神としての龍や蛇がもつ、人間的な理屈や価値観からはとらえきれない両義的な性格や、曖昧なようであるが厳然と存在する神と人間、自然と人間との間にある境界線が浮き彫りとなった。

今後の課題としては、本稿で示したような龍や蛇と人間との関係が、具体的な場所と時間をもった環境と照らし合わせた時に、さらにどのような意味を持ってくるのかという問題がある。例えば、水神としての龍や蛇について一般的にいわれていることと、木曾三川流域の民話で登場するそれらとでは、微妙な食い違いがある。本稿で指摘した、同一の蛇や龍の行為に確認されるとらえがたさ（5.1）はその一例だがそれだけでない。平安時代の作品である『今昔物語集』や『本朝法華験記』では仏法によって制圧され、追放される存在として龍や蛇は位置付けられているが、木曾三川流域においては近世に入り低湿地の新田開発が進んで堤防が築かれる段階、すなわち人間の自然に対する介入がより強まっていく段階においても、度重なる築堤の失敗を川に住む神である白竜のためだとする信仰が根強く存在するのである（岐阜県養老郡養老町・釜段輪中）。このように、場所と時間が特定可能な「伝説」に着目すると、土地によって自然に対する考え方や見方が異なることもより明確となる。本研究ではこれを、同じ時代に先進的な物語と旧時代的な物語があったのだと理解するのではなく、同時代の複数性として理解したい（マッシー 2014）。木曾三川流域の具体的な地形条件、気候条件と人間の営みを積分した先に、龍や蛇が示す自然の物語を理解すること。これが目下の課題である。

注

- 1) 生田（2005）は、環境言説においてしばしば「人間中心主義」に代わる代替ビジョンとして、自然環境を中心におく「エコ中心主義」が提唱されることに警鐘を鳴らす。生田によれば、どちらの思考枠組みも「中心」と対置される「周辺」を不可避的に想定しているという点で、また、エコ中心主義は、環境破壊の元凶である人間側が果たすべき責務に関する検討を困難にするという点で、真の人間と自然の関係の再構築には至らないとする。代わりに生田は、人間の行為と自然との間の、複雑で分かち難い関係を組み込んだ視角として、空間的かつ時間的な単位としての「環境」を考えることを提案する（生田2005, p.56）。生田が示すような、自然-人間関係を空間や場所といった視点から考えることの重要性は、空間や場所に関する学問である地理学でも同様の議論が展開されている。それが、空間を自然と社会や文化との融合として理解する「自然の地理学」である（中島2005；浅野・中島2013）。また、地理学者の森正人は、

マテリアル・フェミニズムの論者であるNancy Tuanaの議論を引きながら、大地の上で織りなされる自然と社会の多孔的な関係は、特定の空間や場所の自然—人文地理によって条件づけられると述べる。ここにおいても、自然と人間の関係性を見る視角として空間や場所に注意が向けられる（森2020）。

- 2) 本文の後の部分でも述べるが、本稿における龍や蛇の表記の仕方は、筆者自身の意見を述べる場合は「龍」や「蛇」を、文献に依拠して言及する際はそこでの表記に従っている。
- 3) ただし、『民話集』に収められた民話の中には龍が退治されるケースも2話のみが存在する。本文でとりあげた池田町の白竜の民話のほか、池田町の東側に隣接する岐阜県揖斐郡大野町でも、田畑を荒らす巨大な竜が、移り住んできた武士に退治されるという民話がある。しかしこの話には、退治した武士が竜の魂によって討たれるという後日談があるため、龍の力の絶対性を示す物語として解釈することも可能だろう。

謝辞

本研究にあたり、海津市歴史民俗資料館の梅山勝則様、学芸員の中島くるみ様に大変お世話になりました。深く御礼申し上げます。

参考文献

- 浅野敏久・中島弘二：自然の地理学—自然と社会の二元論を超えて，浅野敏久・中島弘二編著『自然の社会地理』（ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第5巻）海青社，pp.13-37，2013.
- 生田省悟：「人間中心主義」か「エコ中心主義」か—代替的環境ビジョンをめぐる—，金沢法学，47-2，pp.41-58，2005.
- 木曾三川歴史文化資料編集検討会編：水にまつわる民話集：KISSO創刊一〇〇号記念特別号，国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所調査課，2017.
- 佐々木高広：民話の地理学（シリーズ妖怪文化の民俗地理1），古今書院，2014a.
- 佐々木高広：神話の風景（シリーズ妖怪文化の民俗地理3），古今書院，2014b.
- 田中貴子：渡来する神と土着する神，山折哲雄編『神の始原』（日本の神1），平凡社，pp.173-208，1995.
- 田辺 悟：竜神，山折哲雄監修『日本民俗宗教辞典』東京堂出版，pp.586-587，1998.
- 中島弘二：「自然」の地理学，水内俊雄編『空間の政治地理』，朝倉書店，pp.85-10，2005.
- ビュエル，L.・ハイザ，U.K.・ソーンバー，K.（森田系太郎監訳）：文学と環境，小山一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』，勉誠出版，pp.193-257，2014.
- 古家信平：水をめぐる信仰，山折哲雄監修『日本民俗宗教辞典』，東京堂出版，p.537，1998.
- マッシー，D.（森正人・井澤高志訳）：空間のために，月曜社，2014.
- 森 正人：龍蛇と菩薩，和泉書院，2019.
- 森 正人：粘的多孔性と文化の地理，2020年度人文地理学会大会要旨集，pp.60-61，2020.
- 八木あゆ美：龍の研究，龍谷大学紀要，27，pp.363-367，2005.
- 柳田國男：民間伝承論，共立社，1934（＝（1998）『柳田國男全集』8 筑摩書房）
- Barad, K. : Meeting the universe halfway: Quantum physics and the entanglement of matter and meaning. Durham and London: Duke U P, 2007.
- Iovino, S., and Oppermann, S.: Material ecocriticism: materiality, agency, and models of narrativity. Ecozon 3-1, pp.75-91, 2012.

〈ウェブページ〉

- 結城正美：エコクリティシズムのアクチュアリティ（インタビュー），More than human, 1, 2020. <https://ekrits.jp/2020/07/3717/>（最終閲覧日：2021年5月4日）